

理系女子 増える「リケジョ」もっと前へ

「リケジョ」という言葉を存じですか？ 全国的に増えている、理系学部で学ぶ女子学生のことです。県内の高校では、理系に進む女子が9年間に5割も増えました。志望者を応援しようと、学校や企業が取り組みを強めています。

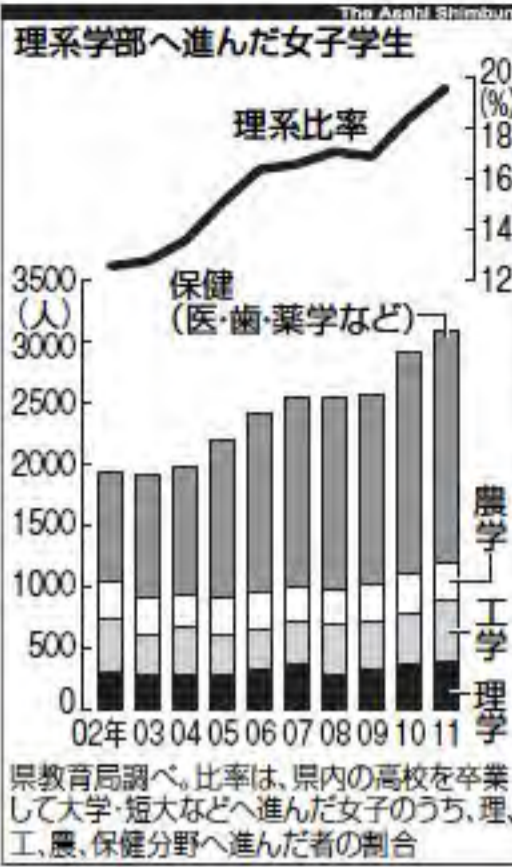
学校や企業支援強化



「理系」の魅力語る研究者(右端)の言葉に聴き入る生徒たち

スーパーサイエンスハイスクール(SSSH)

科学教育の振興と人材育成に向け、文部科学省が2002年度に始めた制度。SSSHに指定された学校は、補助金を受け、理科や数学に重点を置いたカリキュラムの開発や、大学や研究機関との連携などを進められる。全国で計145校あり、県内では現在、浦和一女、大宮、川越、川越女子、春日部、熊谷、不動岡の県立7高校と、私立の早大本庄高校が指定されている。



「スーパーコンピュータ」を駆使してデータを分析し、海外の研究者と英語で議論をたかかわせます

「数学は苦手。でも、環境汚染の問題を科学の力で改善したい思いが強くなり、研究者の道を選びました」

今年1月末、県立浦和第一女子高(さいたま市浦和区)で座談会「研究者ライフ体験」が開かれた。

次世代の女性研究者育成を目指して開かれた催しで、浦和一女高や埼玉大、資生堂などが開催。物理学や環境化学などの研究者と学生時代の体験談を交えながら研究生活を披露した。参加したのは「スーパーサイエンスハイスクール」に指定され、リケジョが目立つIIグラフ。

保健分野への進学増

リケジョが増えた背景には、不況の中、文系よりも理系の方が就職に有利とされていることもあるようだ。なかでも、医師や薬剤師、看護師などの資格につながる「保健」分野への進

目をめざす生徒が多い、浦和一女、大宮、川越女子、不動岡の県立4高校の女子生徒64人。参加者はメモをとりながら熱心に聴き入り、質問も相次いだ。

血管の仕組みを研究する東大大学院講師の山本希美子さん(47)は、自ら実験器具を作りながら研究を重ね、動脈硬化の治療につなげようと活動していることを説明。「答えは教科書には載っていない。未来の教科書をつくっていく、という思いで研究を続けている」と語りかけた。

今春から大学で生命医学を学ぶ予定の浦和一女高3年、山脇紗耶さんは「科学者の体験談を直接聞ける貴重な機会。再生医療などを研究したいという思いが強まった」。川越女子高1年の藤村香さんは「農業系へ進み、地球環境問題の解決に役立つ仕事に就きたい」と話した。

資生堂は、若手社員が中学や高校を訪れ、理系を選んだ経緯や研究テーマを紹介する「出前授業」も各地で開催している。

担当する研究員の養田裕美さん(27)は「多様な女性研究者が増えれば、科学技術の力で社会はよくなっていく」と生徒らに呼びかけた。

実験通じた友人とのつながりも大きな宝



卒業後、製薬会社に勤めましたが、科学の楽しさを多くの人々に伝えたい、という思いが募り、1年で辞めてテレビの世界に転じました。

キャスターの傍ら勉強を重ね、4度目の挑戦で気象予報士の試験に合格。今はNHK「ニュースウオッチ9」の気象キャスターとして、天気図などをもとに毎日、原稿を書いています。子どものころから大好きな雲や雪などの現象を、科学的に解説できることの喜びを感じています。こうした力は、高校や大学で培われました。実験を通じた、友人や先輩との人間的なつながりも、「理系」で得た大きな宝です。

気象予報士 井田 寛子さん(33)

春日部市で生まれ育ちました。幼いころから、雲の動きを追いかけ、ホテルが光る仕組みに想像を巡らせる「理系女子」でした。

淑徳与野高(さいたま市中央区)では、炎によって金属元素特有の色に輝く「炎色反応」の美しさに感動しました。「花火の着色に使われている」という恩師の科学的な説明もよく覚えています。

筑波大では化学を専攻。東京湾の海底の土を解析し、数千万年前の環境変化を研究しました。チームを組み、土を細かく砕いて薬品を入れ、分析していく地味な作業を数カ月も繰り返します。予測通りの結果が出た時の達成感や、思わぬ結果にたどり着いた時の高揚感に引き込ま

「好きなことを追求できる」「就きたい職業への就職率の高さ」が多かった。

一方、女性科学者が増えるのに必要なことについて、5割超が「職場での出産・育児・復職の支援制度」「職場などでの女性研究者への理解」をあげ、十分な環境が整っていないことへの不満もあった。

「研究者ライフ体験」の開催に携わった埼玉大准教授(理科教育学)の小倉康さんによると、世界的に男女間で学力に差はなく、女性の研究志向は強まっている。しかし、女性が理系分野に進出することに対し

「よかった」と思うことは、「好きなことを追求できる」「就きたい職業への就職率の高さ」が多かった。

一方、女性科学者が増えるのに必要なことについて、5割超が「職場での出産・育児・復職の支援制度」「職場などでの女性研究者への理解」をあげ、十分な環境が整っていないことへの不満もあった。

「研究者ライフ体験」の開催に携わった埼玉大准教授(理科教育学)の小倉康さんによると、世界的に男女間で学力に差はなく、女性の研究志向は強まっている。しかし、女性が理系分野に進出することに対し